

2009年10月4日から7日まで、カナダのブリティッシュコロンビア州ヴィクトリアにてHI分野では著名な国際会議の一つ、UIST (ACM Symposium on User Interface Software and Technology) 2009が開催された(図1)。発表はシングルセッションで行われ、すべてのセッションを聴講できる点に特徴がある。

口頭発表は全部で33件(うち12件はTech Note)あり、全体の採択率は18%であった。昨年に引き続き、今年もMicrosoft Researchが関わる発表が多く、口頭発表の約半分を占めていたのが印象的であった。

今回からの新企画として、これまでの口頭発表、Keynote、Demo&Posterに加え、Wacom、Nokia、Adobeなどの企業が出展するSponsored demosや、Student Innovation Contestという学生限定コンテストが設けられた。Student Innovation Contestは、Microsoftが提供する感圧センサ付キーボードを使って自由なデモを行う、というもので優勝チームには賞金\$2,000と自慢する権利、SIGGRAPH 2010 Emerging Technologyでの特別な配慮がなされるというものであった。コンテストは1日目のDemo&Posterセッション(図2)と同時に行われ、観客の投票により3部門、計6チームが賞金と記念品を手にした。

KeynoteではMacknik氏、Martinez-Conde氏(バロウ脳神経研究所)が、人は如何にして騙されるのかを錯視の事例や動画を用いて紹介した。HIを学ぶ者として、人の認知特性には以前から関心があったため大変興味深く聴講した。

今年のBest paperは、Villarら(Microsoft Research Cambridge)による“Mouse 2.0: Multi-touch meets the Mouse”が受賞した。



図2 Demo & Poster セッションの様子

既存のマウスにマルチタッチセンシング機能を付与することでデスクトップでのインタラクションを豊かにする、というコンセプトのもと、異なるセンシング技術を利用した5つのプロトタイプを提案する内容であった。この会議の直後に、Apple社がMagic Mouseというこれもマルチタッチ機能を搭載したマウスを商品化しており、今後こうした入力デバイスの普及により、既存のWIMP型システムにおけるインタラクションがどう変容していくのか、注目したい。

Lasting Impact Award (過去にUISTで発表された論文の中で後に続く研究に多大なる影響を与えたものが選ばれる)にはタンジブルという大きな一分野の祖となった“The metaDESK”が選ばれた。

その他、以下のような口頭発表が行われた。

Hilligesら(Microsoft Research Cambridge)は、“Interactions in the Air: Adding Further Depth to Interactive Tabletops”という、距離画像センサを利用し、卓上平面だけでなくその上空にまで作業空間を拡大するテーブルトップ型システムを発表していた。

Moscovitch (Microsoft Research-INRIA Joint Centre) による“Contact Area Interaction with Sliding Widgets”は、タッチ操作をする際、指が端末に設置している「面」で操作するという研究で、それに応じたGUIの設計やインタラクション手法について述べていた。

来年のUISTは10月3日から6日までアメリカのニューヨークで開催される予定である。

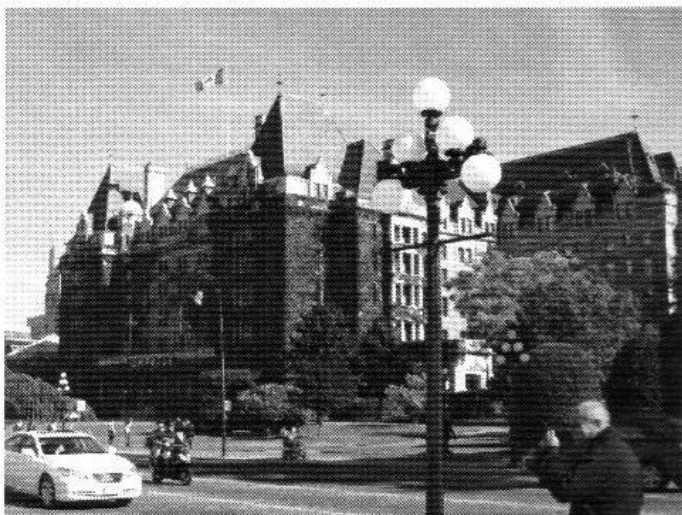


図1 会場の The Fairmont Empress